

『山路の露』の文学史的的位置について

湯川, 直美
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9368>

出版情報：語文研究. 89, pp.22-32, 2000-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



『山路の露』の文学史的位置について

湯川直美

はじめに

これは、かの光源氏の御末の、かほる大将ときこえし御あたりのことなれば、そのつゞきめいたるこそ、いとかたはらいたう、つゞましけれど、ゆめくさには侍らず。たゞかのをのゝ里人に、たづねあひたりしありさま、こなたかなたの御けしき、くはしうみける人の、ゆめのやうなる御中の、哀に忍びがたくおぼえけるまゝに、なにとなく筆のすさみに書をき侍る。

このような書き出しで始まる『山路の露』^(注1)は、『源氏物語』の「夢浮橋」に続く内容を持つ。しかし作者自身は「ゆめくさには侍らず」と述べており、『源氏物語』の続編を称してはいない。もちろん『源氏物語』の影響は無視できないが、『山

路の露』もその書かれた時代から決して自由ではありえない。後人の手によるこの物語を、『源氏物語』との関係のみで論じ続けるのは不十分であると考える。

『山路の露』の文章表現を見てみると、流麗な筆致で歌語がちりばめられている。歌語はそれがいつの時代に流行したか、どのような詠まれ方をしたかなど、その時代の風潮を映している。『山路の露』に使われている歌語は、平安末期に多用されたものや、新古今集時代に愛好されたものが多い。浮舟の住む小野の草庵の描写などは、『新古今集』及びその周辺の和歌を引歌として取り込みつつ、孤独と無常との中世的雰囲気^(注2)に染め上げられている。

『山路の露』には浮舟の居所を知った薫が小野の里を尋ねていく場面があるが、それは『狭衣物語』で飛鳥井姫君の行方を求めて常盤の里に赴く狭衣の姿と対比されて描かれている。『山路の露』は、『源氏物語』の人物を登場させながらも、

『源氏物語』の続編」の名に甘んじることはない。むしろ『源氏物語』本編とは一線を画した物語の展開が見てとれる。

本稿は、『山路の露』の歌語や文章表現をその成立以前の文学作品と比較検証することにより、『山路の露』の主題、そしてその文学史的位位置について考察するものである。

一

平安末期に成立した『堀河百首』には、「すみがま」題で以下の十六首が撰ばれている(傍線は稿者による。以下同じ)。

としをへて爪木こりくべ炭竈に煙をたえぬおほ原の里

(二〇七三)

浦しまの箱ならねどもすみがまはとしのあくるをくゆるなりけり

(二〇七四)

山ふかみ焼くすみがまのけぶりこそやがて雪げの雲と成りけれ

(二〇七五)

おほ原やをののすみがま雪ふりて心ぼそげに立つけぶりかな

(二〇七六)

炭がまやそこともみえずふる雪に道たえぬらんをの里人

(二〇七七)

朝まだき谷たつ雲と見えつるは槇のすみやくけぶりなり

けり (二〇七八)

大原やをののすみがま雪ふれどたえぬ煙ぞしるべなりける (二〇七九)

炭がまのけぶりならねど世の中を心ぼそくもおもひたつかな (二〇八〇)

すみがまにたつけぶりさへをの山は雪げの雲とみゆるなりけり (二〇八一)

さびしさは冬こそまされ大原ややく炭竈の煙のみして (二〇八二)

炭がまに薪こりたく夕ぐれはおのれけぶたき小野の山人 (二〇八三)

をの山に煙たえせぬすみがまをむろの八しまと思ひけるかな (二〇八四)

すみがまのくちやあくらむをの山に煙のたかく立ちのぼるかな (二〇八五)

み山木を焼くすみがまにこりくべて煙たえせぬ大原のさと (二〇八六)

よも山の冬のけしきになるままに小野の炭がま煙立ちます (二〇八七)

須磨の浦にしほやくあまの煙かともぞまがへたるをの炭がま (二〇八八)

このように、『堀河百首』における「すみがま」はほぼすべ

て「小野」と結び付けられている。この「をののすみがま」という言葉は、『堀河百首』以前の例は見出せず、類想歌としてわずかに次のような歌を挙げられるのみである。

み山木をあさなゆふなにこりつめてさむさをこふるを
ののすみやき

〔拾遺和歌集〕 一一四四 曾禰好忠

川村晃生氏は「炭竈」を「元来好忠が新たに発掘した素材であったと思しい」としている。そして一〇七六番歌の「おほ原やをののすみがま」、一〇八一番歌の「大原ややく炭竈」などの表現が、『好忠集』の、

おほはらやまきのすみがま冬くればいとどなげきのか
ずやつもらむ

(三三五)

に拠る可能性を示唆している。^(註5)

また竹下豊氏は、好忠が詠んだ「み山べの里」が「院政期以降、従来以上に顕著になってくる隠逸志向、山居趣味と連動」して、『堀河百首』歌人に注目されて詠み継がれ、新古今歌人たちが多く詠むようになった過程を説明した。この『堀河百首』における一連の「すみがま」歌により、雪降る小野の里の炭焼きの風景が平安末期から鎌倉初期にかけて和歌の

世界に一気に広まったと推測される。

竹下氏によると『堀河百首』は後世の百首歌への影響が大きだけでなく、『堀河百首』自体にも『源氏物語』の歌ことばの受容の跡がみられ、『源氏物語』と新古今歌人たちとの間に占める『堀河百首』の位置を無視できない」という。つまり『堀河百首』の歌語や表現は、和歌史のみならず物語史の中にも位置づけられる可能性を秘めているのである。

そして『山路の露』後半には、薰と浮舟の再会後の小野の風景と二人の歌の贈答を、『堀河百首』の「すみがま」歌を巧みに取り込んで描いた場面がある。

をのには、たゞつきせぬながめにて、冬にもなりにけり。みやこだに、ゆきあられがちなれば、ましていとゞしくかきたれ、けぬが上にまたふりそひつゝ、いくへか下にうづもるゝみねのかよひちを、ながめいでたる夕暮、ふじのねならねど、雪のうへよりけふり、いとかすかにたなびくを、これやさは、をとにきゝこし山人の、すみやくならんと、心ぼそさもいはんかたなし。

すむ人の宿をばうづむ雪のうちにけふりぞたえぬを
のゝすみがま

例のかきくらし、つねよりも日かずふるころは、いとゞ、つま木こる山人の跡さへたえはてたるに、わりなくわけいる御つかひのくつのをとも、めづらしくて、人々はし

つかたにいでゝみる。

「みやこにだに、さへくらすころのけしきに、いかにと
思やりてきこえてなん。

いかばかりながめわらんかきくらし雪ふるころの
をのゝ山人」

これらは、小野の里で冬を過ごす浮舟の目に映った風景である。雪景色を眺めていた夕暮れ、雪の上からかすかにたなびく煙が目に入る。炭焼きの煙である。どこまでも真っ白な中、煙だけがたなびいているのである。そこで詠まれた「すむ人の」歌は、浮舟の心情を表現している。自分の住む所さえも埋めてしまいうようなほど降る雪の中に見える炭焼きの煙は、浮舟にとっては心細さを増すものでしかない。

先程の『堀河百首』の「すみがま」の歌と『山路の露』のこの場面とを、それぞれ傍線部を中心に比較してみると、用語、表現に重なるものが数多いことがわかる。一〇七六番歌の「心ぼそげに立つけぶりかな」、一〇八〇番歌の「心ぼそくもおもひたつかな」などの表現は、まさしく「すむ人の」歌の浮舟の心情と重なり合う。

また、そんな浮舟に薫が送った「いかばかり」の歌は、浮舟を「をのゝ山人」にたとえ、雪に覆われた小野に暮らす浮舟を気遣う内容となっている。その「をのゝ山人」は、一〇八三番歌の、そして『山路の露』冒頭にある「をのゝ里人」

も浮舟を指すが、これは一〇七七番歌の表現である。

さらに、浮舟の心内語である「をとにきゝし山人の、すみやくならん」は、『山路の露』の世界において小野の炭焼きが冬の風物として定着していることを表している。

それに対して『源氏物語』の小野は、冬の風景にほとんど筆を費やされていない。(注)

雪深く降り積み、人目絶えたるころぞ、げに思ひやる方
なかりける。年も返りぬ。春のしるしも見えず、凍りわ
たれる水の音せぬさへ心細くて、「君にぞまどふ」とのた
まひし人は、心憂しと思ひはてにたれど、なほそのをり
などのことは忘れず、

かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日

も悲しき

など、例の、慰めの手習を、行ひの際にはしたまふ。

(手習)

『山路の露』と比較すると、明らかに描き方が異なっている。『源氏物語』の小野にはもちろん「すみがま」は出てこず、浮舟が「降る雪」からの言葉での連想で「ふりにしことぞ」と詠んだだけである。しかし『山路の露』では、果てしなく降り積もる雪そしてその上にたなびく炭焼きの煙を具体的に描き出し、それを眺める浮舟の心情をより切実に浮かび上が

らせている。そして「つま木こる山人の跡」さえ絶え果てたと述べることにより、そんな山里に使いをやり、浮舟を氣遣う歌を送った薫の浮舟への並々ならぬ愛情を強調することになるのである。

二

『山路の露』で、浮舟の消息を知った薫が小野の里に向かう場面がある。

くれぬれば、いみじう忍びやつしたる女車のさまにて、
山道になりてぞ、御馬にはのりうつり給ける。夕ぎりたちこめて、みちいとたどくしけれども、ふかきころをしるべにて、いそぎわたり給ふも、かつはあやしく、いまはそのかひあるまじきをとおぼせども、ありし世の夢がたりをだに、かたりあはせまほしう、行さきいそがるゝ御心ちになん。うきぐもはらふよものあらしに、月なごりなうすみのぼりて、千里のほかまでおもひやるゝ心ちするに、いとゞおぼしのこすこともあらじかし。山ふかくなるまゝに、道いとしげう、つゆふかければ、御ずいじん、いとやつしたれど、さすがにつきぐしく、御さきの露はらふさまも、おかしくみゆ。

こうして薫は浮舟と再会し、自分の心情を訴える。傍線部の表現は、『万葉集』にもある次の歌の引用と考えてよい。

夕やみは道たどたどし月待ちてかへれわがせこそまにもみん
〔古今和歌六帖〕 三七一 大宅娘女)

この歌は古くから知られていたようで、『源氏物語』にも三度引かれている。

幼き心地に、いかならんをりと待ちわたるに、紀伊守国に下りなどして、女どちのどやかなる夕闇の道たどたどしげなるまぎれに、わが車にてゐてたてまつる。(空蟬)

「さらば、道たどたどしからぬほどに、とて、御衣など奉りなほす。『月待ちて』とも言ふなるものを」と、いと若やかなるさましてのたまふは憎からずかし。

(若菜下)

「道いとたどたどしければ、このわたりに宿借りはべる。同じうは、この御簾のもとにゆるされあらなむ。阿闍梨の下るるほどまでなむ」と、つれなくのたまふ。

(夕霧)

「空蟬」は源氏が小君を利用して再度空蟬に会おうとする場面、「若菜下」は女三の宮のもとから紫の上のもとへ帰ろうとする源氏の「道いとたどしからぬほどに」という言葉に対して、「月待ちて」と機知に富んだ返事をする女三の宮とのやりとりである。最後の「夕霧」は、夕霧が落葉の宮のもとで、何とか長居しようとする際の言葉である。

このようにして挙げると、『山路の露』が「夕やみは」の歌を引用した『源氏物語』をさらに引用した、ともとれる。しかし『源氏物語』の例はいずれも「夕やみは」の歌の引用部分に喚起されるイメージに乗りかかっているのみで、具体的な場面としての広がりはない。ところが『山路の露』の先程の場面では、「道たどし」なのは実際に薫が小野の里に向かっている道中、いわば物語中の実景である。もとの引歌が浮き上がってはいない。『源氏物語』とは明らかに手法が異なっている。この相違はもちろん、『山路の露』作者の創意工夫と見ることもできる。しかしここで試みに、『源氏物語』と『山路の露』との間に『狭衣物語』の存在を想定して考察してみたい。

『狭衣物語』は、和歌や漢詩文を多く取り入れた技巧的な文章で知られている。中世王朝物語に与えた影響は大きい。『狭衣物語』に登場する飛鳥井姫君は、『源氏物語』にいう夕顔、浮舟といった女性にも似た人物である。狭衣に愛されて子供も身ごもるが、乳母の奸計で筑紫に下ることになり、そ

の途中で虫明の瀬戸に身を投げる。そして命は助かるが狭衣に再会することなく子供を出産し、その後死んでしまう。偶然兄僧と会ったことで姫君の行方とその死を知った狭衣は、せめて忘れ形見^(注)だけにでも会おうと、ただちに常盤の里を訪ねていく。

月も遅く出でて、空も霞みわたりたれば、雲のたたずまひだにはかばかしうも見えず。道の空もたどたどしう、ならはぬ御心地にいとど心細くわりなし。(巻三)

細かい描写は異なるが、『狭衣物語』は「夕やみは」の歌を、狭衣が常盤の里に向かう場面にやはり実景として取り込んでいる。元の歌に詠まれている「月」が出てくるのも『山路の露』と同様である。引歌の多用で知られる『狭衣物語』のこの場面があつてこそ、『山路の露』の薫の小野の里訪問の場面が描かれたのではないか。

そして『狭衣物語』では、狭衣は常盤の里に到着し、姫君の兄僧と再会する。そして女君が常盤の里に至り尼となった経緯を初めて知る。山里にわざわざ尋ねてきた貴公子に、周囲の女性たちも好奇の目を隠せない。『狭衣物語』では、狭衣の訪問を待たずに亡くなった姫君を惜しむ会話が交わされる。

若き人々物語するを聞きたまへば、出でたまはぬと思ふなるべし、「あな口惜し。いますこし疾く尋ねておはせで」をかしの御匂ひや。なほとまりて枕にもうつりにたり。かかる人を、このわたりに、時々にても待ちつけはべりて、おはせば、いかにめでたからまし。いみじかりける御心惑ひは、げに身を投げたまひけむもことわりぞかし」「やむごとなき人々に、いかでいかでと思はれたまふに、つゆばかり心とどめたまはで、心尽くしたまふ人々多かりとか「姫君のうつくしさに、なべての児ともおぼえたまはざりしは、かくにこそおはしけれ。年経にける名残をだに、さばかり忍びがたげなりつる御けはひを、この暁までの命だにおはせざりつらむ。いみじかりける幸ひを。口惜しきことなりや」

(卷三)

これが『山路の露』になると、「例の、色めいたるさしすぎ人共」が再会した二人の様子を覗き見しつつ、薫の姿を「いみじうえんなる御さまかな」とほめたたえている。浮舟と薫との仲がもとどおりになることを願っているかのようにである。

例の、色めいたるさしすぎ人共は、「姫君のうちとけたりつる御さまを、いかに見きこえ給らん。かかりける御こと共に、やつい給しことこそ、今更口おしけれ」など

いひて、そなたのとをりの御かうしほそめて、のぞきければ、つまどのみす、ひき、おはすめり、さしぬきのすそばかり、ほのかにみゆるを、「いみじうえんなる御さまかな。いまやうの人は、かうしもあらぬ物を。思やりふかき御しきこそ」など、めでたまどふも心づきなし。

このように、『山路の露』の薫は、『狭衣物語』の狭衣の行動を辿っているかのような印象を与える。『源氏物語』の薫に比べて、『山路の露』の薫は「性急で情熱的になっている」^(註10)。「いかにも爽やかな主人公造型」という評価もある。その急激な変化は、間に『狭衣物語』を挟むことでこそ起り得たのではないか。

『山路の露』冒頭部は、『源氏物語』の続編であることを否定してみせたあと、次のように述べる。

その人の心にも、さこそ人にはもらさざりけんを、かりそめる旅の空にて、ぬしさへはかなく成にければ、あだなる人の、その行末をとふらはんとて、もしほ草、かきあつめけるそゞろごとゞも、みなえり出て、きやうのかみにすかせけるつるでに、これをみつけ、なにのきゝ所あるふしもなければども、はていかならんと、思ひわたる人の行末成けるとみるばかりの、せめておかしさに、のこしをきけるにやあらん。

薫と浮舟の物語のその後を書き置いたある人が亡くなり、それを弔おうとした作者が文反古を集めて写経のための紙に漉かせようとしたというのである。これと同じような場面が『狭衣物語』にもある。こちらは物語も終わりに近づき、狭衣がすでに帝となったあとのことである。飛鳥井姫君が生前書き残した絵日記が発見される。それを見た狭衣の帝は泣き、日記を裂いて経の紙に加えて漉かせ、その紙に金泥の涅槃経を自ら書くのである。

過ぎにけるかたを見るだに悲しきに絵に描きとめて別れぬるかな

などおぼしめせど、ありし扇ばかりを残させたまひて、みなこまごまとなして、経の紙に加へて漉かせたまひて、金泥の涅槃経、御みづから書かせたまひけり。かの常盤をばやがて寺になさせたまひて、この御料の功德は、そこにてぞ月日に添へて作り重ねさせたまひける。

(巻四)

この場面の類例は他にもあり、西木忠一、池田良子両氏によつてまとめられているが、^(注12)『狭衣物語』が『山路の露』に与えた影響はもはや疑いないであろう。

三

「道芝の露」という言葉がある。『狭衣物語』では飛鳥井姫君の隠喩として用いられる。

物思ひの花のみ咲きまさりて、水際隠れの冬草は、いづれともなく、あるにもあらぬなかにも、尾花がもとの思ひ草は、なほよすがとおぼさるるを、むげに霜に埋もれ果てぬるは、いと心細く、おぼし侘びて、

尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露あさまじう行方なく誰とだに知らでやみにしは、なほ思ふにも余る心地ぞしたまふや。在りとも、ことごとしうまことしきさまに思ふべきほどにはあらざりしかど、飽かぬ別れは何にもまさればにや、木草につけても忘れがたうのみおぼさる。

(巻二)

思ひ出づるは、なかなかこよなうめざましかりける道芝の露の名残なめりかし。

(巻二)

狭衣に愛され子を身ごもりながらも、虫明の瀬戸に身投げするといふ悲運の一生を終えた飛鳥井姫君は、路傍の露のようにはかない存在であった。そして姫君はその悲運なるがゆ

えに、後々まで狭衣の心に強い印象を残す。狭衣にとって飛鳥井姫君は、「行きずりの路傍の草に置く露のようにはかない、それだけにきらりと純粹に美しい強い印象の女」^(注13)なのであった。以降、「道芝の露」が積極的に和歌に詠まれるようになる。勅撰集では『新古今和歌集』に次のような歌がある。

たれゆきてきみにつげましみちしばの露もろともにきえ
なましかば (一一八七)

きえかへりあるかなきかのわが身かなうらみてかへるみ
ちしばの露 (一一八八)

ところで『山路の露』の題号である「山路の露」は、次の場面による。自ら小野に出向いた薫が、浮舟に自分の心情を訴えかける場面である。

やうく明がたちかきこちすれば、出給なんとて、
「いとかう心ゆかず、おぼしむすばれたるこそ、うき身のとがに思なせども、猶うれたけれ。むかしより、かゝるかたにすゝみにし心なれば、いましもあはれそひて、さまことなるむつびまでも、おぼつかなからぬ程にきこえまほしきに、かばかり世ばなれたらぬ所に、うつろはせきこえん。むかしの山里は、宮のおはせし世より、

あはれに思しを、うかりし後は、さとの名をさへかこちてこそ、ありしよりけにあらしはてにしか。さても此あかつきの空ばかり、心づくしなること、まだ身にしられざりつる。夜ふかきつゆにしほれんそでよ。いかがおぼしわけん」とて、

思やれ山路の露にそほちきて又わけかへるあか月の袖

とうれへ給へる哀さも、なをざりならんや。

露ふかき山路をわけぬ人だにも秋はならひの袖ぞしほるゝ

薫は、明け方に「山路の露」に濡れて帰る自分を思いやっ
てほしい、と言う。それに対して浮舟は、秋というのは山路
を分けてやって来ない人にも同じように袖が濡れるもので
す、とそっけない。この「山路の露」も「道芝の露」同様、
物語の女主人公の隠喩と考えられないだろうか。狭衣は姫君
に再会することはなかったが、薫は浮舟に再会を果たした。
しかし浮舟は心を動かさない。狭衣にとって飛鳥井姫君が
「道芝の露」であるならば、薫にとって浮舟はまさに「山路
の露」である。俗世とは離れた「山路」^(注14)にある「露」、それは
まさに今の浮舟の姿ではなかったか。露のようにはかなく自
分の前から消えて山路に隠れてしまった女性、それが浮舟な
のである。そしてそんな薫に対してかたくなな態度を崩さな

い浮舟の返歌では、「山路の露」は「露ふかき山路」と解体され組み替えられてしまった。「秋はならひの袖ぞしほるゝ」という下の句だけでなく、「山路の露」という呼び名さえも拒否している上の句からも、浮舟の意志の堅さが伝わってくるようである。

『山路の露』の薫が『狭衣物語』の狭衣に重ねられて描かれているように、『山路の露』の浮舟も『源氏物語』の登場人物でありながら、飛鳥井姫君の人物造型に重なる部分を持つ。ただ狭衣の子を産みながらも再び会うことなく死んでしまった飛鳥井姫君とは違い、浮舟は生きて薫に再会した。しかしそうでありながら薫の情熱にもほだされることなく、小野の里から動くことはない。『源氏物語』の続編としてはほとんど進展がないと言われる『山路の露』であるが、『源氏物語』になかった物語の展開と決着がここにある。

おわりに

本位田重美氏は、『山路の露』冒頭部と『建礼門院右京大夫集』の文章とを比較しその類似点を指摘した上、その閨歴からも右京大夫が作者である可能性を示した。『山路の露』は『無名草子』に記述がなく、また『風葉和歌集』にも歌が採られていない。したがってその成立時期を示す資料に乏しい。『源氏物語』で生まれた浮舟の物語は、『狭衣物語』を始

めとして中古、中世の王朝物語に大きな足跡を残した。そのことは『山路の露』にとっても例外ではない。しかしそれだけにとどまてはいない。平安後期から鎌倉初期の物語や和歌をも取り込むことで、『山路の露』は中世王朝物語の一つとして確かにその存在を明らかにしているのである。

注1 『山路の露』の本文の引用は、『鎌倉時代物語集成 第五巻』

(笠間書院) による。

2 原岡文子「山路の露物語」(『体系物語文学史 第五巻 物語

文学の系譜Ⅲ』有精堂 平成三年七月)

3 和歌の引用は、『新編国歌大観』による。

4 片桐洋一「歌枕歌ことば辞典増訂版」(笠間書院 平成十一年

六月)には、「すみがま」が「和歌では『堀河百首』に歌題としてとりあげられるようになってから冬の景物として多くよまれるようになった。「冬のさびしさを象徴することが多かった。」と説明されている。

5 川村晃生「私家集と歌壇―堀河院歌壇をめぐる―」(和歌文学論集4 『王朝私家集の成立と展開』風間書房 平成四年一月)

6 竹下豊「堀河百首」の歌ことばと歌史的位置」(『歌ことばの歴史』笠間書院 平成十年五月)

7 『源氏物語』の本文の引用は、『日本古典文学全集 源氏物語

一(一六)(小学館)による。

8 『夕闇者 路多豆多頭四 待月而 行吾背子 其間尔母将見

9 『狭衣物語』の本文の引用は、『新潮日本古典集成 狭衣物語

上・下』(新潮社)による。

10 河原桐子『山路の露』の構想に関する試論(上)―再会をめぐる薫と浮舟の心情に着目して―(「解釈」平成二年七月)2に同じ。

11 「山路の露注釈」(「大阪樟蔭女子大学論集」第三十一号)

12 9 『狭衣物語上』一五八頁頭注。

13 「山路」は、『古今和歌集』の時代から和歌に詠まれてきた。

14 よのうきめ見えぬ山ちへいらむにはおもふ人こそほだしなりけれ (『古今和歌集』九五五 もののべのよしな)

人めだに見えぬ山ちに立つ雲をたれすみがまの煙といふらん (『後撰和歌集』一二五七 北辺左大臣)

このように「山ち」は「よのうきめ見えぬ」場所であり、「おもふ人」が「ほだし」となる場所でもある。小野で仏道修行の日々を過ごす浮舟にとっては、薫はまさに「ほだし」であろう。「山路」は、このように俗世間とは離れた空間を意味するようである。また二首目は『堀河百首』に導かれて『山路の露』に表現された小野の里の風景そのものである。

15 本位田重美『山路の露』の作者(「国語国文」昭和三十年十二月)

(ゆかわ なおみ 九州大学大学院博士後期課程)